



なぜ日本人は余白
やミニマルを重視する？

建築それ自体を透明で小さくすることで、周辺からの光や風、美しい庭を享受することを重視

→ 建築それ自体よりも、
建築周囲の余白や庭のデザインを重視する

→ 古代からの隠遁者の家と一致

森山邸 2006 西澤立衛設計引用:新建築データ



「小さな建築」や「隠遁者」への関心の高まり

- 『負ける建築』(隈研希、岩波書店、2004)
- 『小さな建築』(富田玲子(家設計集団)、2007.12)
- 隈研希『小さな建築』(岩波新書)2019)
- 『清閑の暮ら』 隠者たちと小さな家に住んでいたのか(大岡敏昭、2013.11)
- 『小さな家の思想 方丈記を建築で読み解く』(文春新書)(長尾重武、2022)
- 『図説 村岡屋と小室の建築誌』(夫婦修、2024)

本当は、大岡敏昭にご講演予定
→2021年にご逝去されていることが判明で断念

2024年



竹の建築 (竹屋 2002 中国) 隈研希 中より
竹の建築と複雑な人間関係を離れ、静かな竹の林の中で建てた「竹林の七軒」の故事から想像できるように、古来中国では竹は、反節的な美学・ライフスタイルを象徴する「聖なる」植物であり、

隠遁思想は全体像がよくわからない。
(各分野で断片的に触れる)

建築史では、古代山荘・抹茶席・煎茶席・近代山荘で少し触れる程度。

庭園史では、神仙思想や隠遁思想が頻繁に記述される。

美術史では、特に詩画軸で述べられる

民家では、 太い空間＝内向き 細い空間＝客用
→細い部材の方が格が高いのはなぜ？



「隠遁思想」とは

世捨て人のように世の中からのがれているさま

↓だが、実際は、

神仙思想、
老荘思想、
仏教、
山里、
ミニマル(＝清(貧しい))
など様々なイメージが複合して、
「隠遁者像」を作り、古代から戦前まで、日本の住宅の理想像となった。

座敷における竹の使用

奈良県宇陀市 旧細川家住宅(通称:薬の館) 江戸末期





中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
-----------	----	----	----	----

トピックス

- 0 中国…隠遁思想の始まり
- 1 古代…隠遁思想の受容
- 2 中世…禅僧の隠遁思想
- 3 近世…庭園や亭における隠遁思想
- 4 近代…隠遁思想の衰退

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
-----------	----	----	----	----

隠遁者の系譜

- ・中国
 - 2C 仲長統
 - 5C初 陶淵明
 - 8C中 白楽天
 - ↓（白氏文集を通じて）
- 平安時代の文学（枕草子、源氏物語）
- 隠遁者（慶滋保胤、鴨長明、西行、吉田兼好）
- ・中世
 - 禅僧の隠遁思想
 - 夢窓疎石→足利義政（東山殿、書院造の萌芽）
- ・近世
 - 智仁親王（桂離宮）→御水尾上皇（修学院離宮）
 - 庭の中の亭、東屋
 - 松尾芭蕉（西行にあこがれ）
- ・近代
 - 近代数寄者（山縣有朋、益田孝など）
 - 建築家は、隠遁思想を述べない→隠遁思想の衰退

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
-----------	----	----	----	----

仲長統＝隠遁思想の始まり

2C末の中国の文人の隠遁者

仲長統「楽志論」

「住宅は広い宅地といふ田園がよい、山を背にして水の流れるに臨むところ。竹林を植え、畑を前に果樹園がある。田園を徘徊し、林で遊び、清流で洗い、寢室では老子の道や書に思いを馳せ、古きを吐き新しきを納めて至高の悟りを求める」

『日本の住まい その源流を探る 現代から古代へ中国の住まい』（大岡敬昭、2008.6）p138

→すでに、竹林、田園、老荘思想、悟り、が隠遁と一体化している

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
-----------	----	----	----	----

仲長統＝隠遁思想の始まり

2C末の中国の文人の隠遁者

仲長統「楽志論」

「凡そ、帝王の下に入りするものは以て身を立て名を上げんと欲するのみ、しかるに名は常には存せず、人生は滅しやすし」（→仏教の無常観（かたちあるものはいずれ消滅する）

「（それよりもそのような世俗を捨て、）ゆったりのみびりて自ら楽しむべく、清潔で広々としたところに家を構え、その志を楽しみむべし」とする。

→老子の無為自然（余計なことをせずあるがままに任せてゆったりと大膽に生きよ）



中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
-----------	----	----	----	----

陶淵明(5C初)

(陶淵明 47歳の時の詩)

(家の)庭には青々とした松が一本高く生え、

大好きな秋の菊が花を見事に咲かせている。

その花びらをつみ、独酌の酒に浮かべると世俗からのがれた思いがいっそう深まる。

日が暮れて、ざわめきは消え、鳥たちも林のぬぐらに帰っていく。

私も東の軒下で心のびやかにくつろぐとき、今日一日をまた生きたということを感じる

→自然賛美

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
-----------	----	----	----	----

陶淵明(5C初)

農耕の喜び

貧乏暮らしは畑仕事で支えであり、今年も精一杯に東林のそばにある田を耕してきた。

春の農作業の苦しみはいま、心配なのは期待はずれの秋の収穫になること。

農業関係の役人が私の田の良い実りを見回り、声をかけられてなごやかに話す。

私たちのように飢えてきた者こそ食べる喜びに湧く。

野良着をきちんと着て一番鶏が鳴くの待ち遠しい

(陶淵明52歳の詩 丙辰(ひのえたつ)の歳八月申 下澗(かそん)の田舎でのどいれ)

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
陶淵明(50初)				
「帰去来の辞」の詩				
「私は朝に夕べにこの塵(わが家)に安らぐ。庭は花葉(菊)の花がならび植わり、木々や竹に覆われている。牀には琴を横たえ、壺にはどぶろくがまだ半分ほどはある」				
↓				
菊 竹 音楽(琴) 酒				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
白楽天(80前)				
陶淵明の思想を受け継ぐ				
旧宅を訪れ陶淵明を慕う詩を残している				
「われ夙(つと)に陶淵明の人となりを慕い、今その旧居をたずねると、先生が厳然としてわが前に立っているように思う」 『訪陶公舊宅(陶公の旧宅を訪う)』				
「(陶淵明は)五本の柳のある家で酒をもって天真を養い、當利の欲を泥土のごとく捨て去った。その先生が亡くなって久しいが、詩文を遺す。それらの肩々はみなわれに飲酒を勧め、その外に何もいうことはない。われは年をとってこのかた、その人となりを慕い、他の点は到底およばないが、昏々として酔うところはかれに倣っている」 『歐南潜體詩(南潜の体に通う詩)』				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
桃源郷を書いたのも陶淵明				
谷川にそった先に、人ひとりか入れない小さな穴をくった先にある理想郷。				
雑木がない、きれいな水源、美しい池、良い田、桃の林、桑、竹がある。				
外国人のような衣服をまとった村人が酒食でてもなされる。				
(陶淵明『桃花源記并序』)				
↓				
美しい山里が理想郷				
田園、竹、水の賛美				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
白楽天の理想のくらし				
「木のどろを四つ、何も描いていない素屏風を張り、漆ぬりの儒、道、仏の書をそれぞれ二、三巻をもちこみ、仰いでは廬山(陶淵明が眺めた山)を眺め、横になっては泉の音に耳を傾け、かたわらに竹や木や石を眺め、朝から晩までつぎつぎと楽しむものがあって休む間もないほどである				
…谷川に臨んで閑坐したり、楽しく泳ぐ魚を眺めたり、ときには鹿の後に付いて行く。(→自然を楽しむ)				
わが身は浮雲のように執着することがなく、わが心は澄む水のように何の俗念もない(→ミニマルな暮らし)				
(白楽天『草堂記』817年)				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
陶淵明(50初)				
大岡敏昭先生による復原図				
図8 陶淵明の家				
『清閑の暮らし。邸宅たちはどんな庵に住んでいたのか(大岡敏昭、2013.11)』				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
白楽天の自宅を詠む				
香炉峯下新山居草堂初成 五架三間新草堂 石階柱竹編牆 南簷納日冬天煖 北戸迎風夏月涼 澗切飛泉纒有點 拂■斜竹不成行 來春更葺東廂屋 紙閣簷簾著孟光				
新たに作ったわが草堂は五架三間の小さな堂である。自然の石を階段とし、桂の木を柱とし、竹で編んだ垣をもって四方をめぐるし、南の軒は日光を入れて冬も暖かく、北の戸は風を迎えて夏でも涼しい。泉からは水がほとばしって飛沫が軒下の石畳に注ぎ、窓を払って斜めに立てる竹はわざと乱雑に植えている				
白氏文集『清閑の暮らし。邸宅たちはどんな庵に住んでいたのか』(大岡敏昭、2013.11) p66				
図13 廬山の草堂				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
白楽天(白居易) 80前				
772-846年				
官僚だったが、左遷されて暇になったことを期に、隠遁生活を送った。				
中隠…陶淵明と違い、官に仕え、山里でなく都市に住むこともあったので、「中隠」と呼んだ。				
「白氏文集」(845年) 平易な言葉で、閑雅快適の情を読み上げた 日本の多くの文学人に読まれ、平安以降の日本文学(枕草子など)に大きな影響を与えた。				

中国…隠遁の始まり	古代	中世	近世	近代
五架三間新草堂				
石階柱竹編牆				
新たに作ったわが草堂は五架三間の小さな堂である。自然の石を階段とし、桂の木を柱とし、竹で編んだ垣をもって四方をめぐるし、				

白楽天の日本への影響

9世紀 白楽天による『白氏文集』(824年)に、

五架三間新草堂
石階桂柱竹編牆

新たにつくったわが草堂は五架三間の小さな堂である。
自然の石を階段とし、桂の木を柱とし、竹で編んだ垣をもって四方をめぐらし、

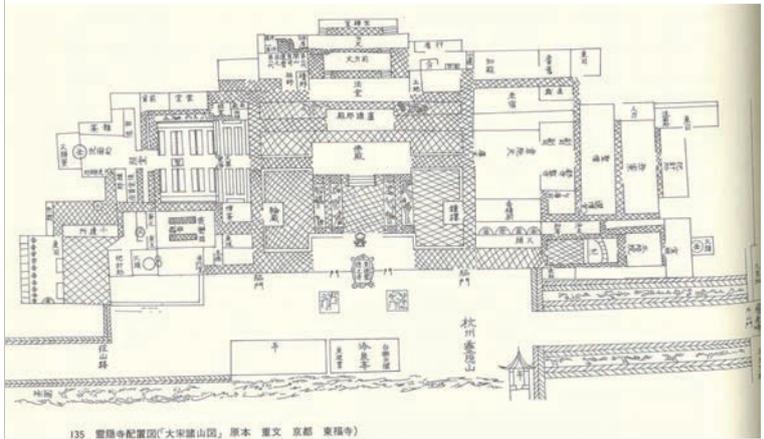
11世紀初
源氏物語の「須磨」の巻で
「竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから珍らかにおかし。
…住まい給えるさま、言はむ方なく唐めきたり」
→ 隠遁者の庵に中国風という認識

14世紀 連歌師宗久は、
隠者の庵について、「所のさまも松の柱、竹のあめる垣わたして田舎びたる」
(『都のつと』1350年頃)

17世紀 智仁親王は、
和歌に「松風の夜琴」とか、「竹にかこまれた住居」など、桂山荘につながる語句が使用される。

高橋康夫『京都町衆の生活空間』(茶通繁華? 座敷と盛地(一)小学院, 1984.11, pp.93-103)

中国の靈隱寺の1247年の姿(大宋諸山図)



135 靈隱寺配置図(大宋諸山図) 原本 重文 京都 東福寺

白楽天の家を真似した例



慶滋保胤『池亭記』982年=平安時代の住宅論。

第四段
私は、六条より北に初めて自分の土地を所有し、四つの垣を築いて一つの門を建てた。蕭相国のように辺鄙な土地を選び、仲長統のように広々とした家に住みたいと思っていた。小さい山を作り、窪を穿ち小さな池を作った。池の西方には小さな阿弥陀堂を建て、池の東方には小さな書庫を建てて書籍を納めた。
小橋小船 私が一番好んで居るものすべてがここにある。
春は東の岸に柳が生え、細い煙のような枝がしなやかに垂れている。
夏は北の戸に竹が生え、清らかな風が颯爽と吹いている。
秋は西の窓から月が見えて、その光の下で書物を読む。
冬は南に且が昇り、背中を暖めてくれる。
朝廷にいるときは帝に身を捧げ、家にいるときは仏に帰依する。

→ 小さいものをポジティブに
→ 家はミニマルに、周囲の庭や自然の四季を豊かに楽しむ



図24 慶滋保胤の池亭

1247年に白楽天撰の「冷泉亭」

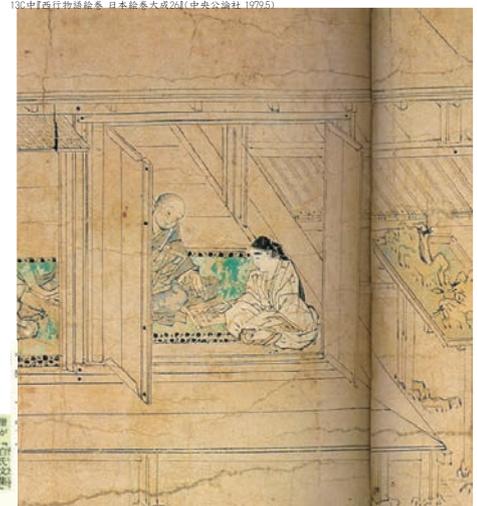


前頁の慶滋保胤『池亭記』は、
白楽天の『池上篇并序』(以下)が元である。

十畝の屋敷に、五畝の庭。
水としては池が一つ。
竹は千本生えている。
土地の狭さなどは言うべきではなく、場所が市街地から離れているとも言うべきではない。
膝を入れるには問題がなく、肩を休めるにも問題がない。
母屋があり、亭もある。
橋もあるし、舟もある。
本があるし、酒もある。(→陶淵明と白楽天が好んだ酒)
歌もあるし、楽器もある。(→陶淵明と白楽天が好んだ琴)
そこにたまたむ翁が、白い鬚を風になびかせる。
その分を知り、余計なことは求めない。(→老荘思想の「足るを知る」)
それは鳥が自然に枝を選び、ゆっくと安らかな巣を求めることに、通じている。
亀が穴の中にいて、海の広さを知らないことにも、通じるかもしれないけれど。
靈験に満ちた鶴と不思議な石。
紫のヒシと白い蓮。
どれをとっても、私自身が好むもの。その全てが目前にある。
たまには、一杯の酒を飲み、二篇の詩を吟じることもある。
妻や子は、幸せの中に暮らし、鶏や犬も悠々としている。
本当にくつろぎに満ち、のびやかである。この中で、私は老後を終えることとしよう。

白氏文集の素談を教えている姿と推測されている場面

(130の西行物語絵巻)



130 西行物語絵巻 日本絵巻大成26(中央公論社 1979)

白楽天のその後の日本への影響

・平安時代
貴族に『白氏文集』が流通
寛弘3年(1007)、天皇から遣使に、茶碗と、白氏文集が送られた。(御堂関白日記)
長和2年(1013)、遣使に、白氏文集と天山山の図が送られた(御堂関白日記?)
『藤原道長の日常生活』(會華一室, p.99-102)

枕草子、源氏物語などの文学作品に白楽天の思想が浸透

・鎌倉時代
吉田兼好が徒然草に、『白氏文集』老子『莊子』などを愛読書として記述。

・江戸時代
和漢の文学に精通した智仁親王が、白楽天と源氏物語を参照して桂離宮をつくった。
(松琴亭 松の中で琴を奏でる)

平安時代

作庭記(110後半)等に見る思想

・神仙思想

泉事

人家二泉かかならずあらまほしき事也。善をさること泉にハしかず。

しかれば唐人必つり泉をして、或蓬萊をまなび、或けだもの(ちより)水をいたす。」

池は魚、若しは鶴の姿に振るべし(→蓬萊山の表現)

(作庭記)

扶桑略記でも、「桃源」「蓬萊」などの神仙的理想郷の記述多数

万葉集に、竹取の翁が丘に登って仙女に逢う描写
徒然草にも、久米仙人の記述あり。

・山里の思想

「その枯山水の様へ、片山のさし、或野筋などをつりいでて、それにつきて石をたつなり。

又ひとへに山里などのやうに、おもしろ(せん)とおもはる、

たかき山を置ちかまうけて、…つかへしらをも、きりかけたるてい(=掛造)にすべきなり。」

→山里+掛造

・ミニマルな思想

家ヲ面白キ体ニ造ラント思ハ、

透タル所多クシテ地ヒサシ可有也、

ツチ底ハアマタノ徳アリ、冬アタカカニシテ夏ハズシ、

又雨儀ノ時コトニヨシ大床タル人又ワツクヒナシ」

『山水抄』「造作の事」

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

源氏物語の貴族邸の庭園(1008年)

亀の上の山もたづねし舟のうちに老いせぬ名をばこに残さむ
 「龍頭鶏首を、唐の装ひにことごとしうつらひて、櫛どりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、
 唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に來たらむ心地して、あはれにおもしろく、
 …
 えもいはぬ匂ひ散らしたり。他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほは笑み、
 …
 亀の上の山もたづねし舟のうちに
 老いせぬ名をばこに残さむ
 …
 行方も、帰らむ里も忘れぬべう、若き人々の心をうつすに、ことわりなる水の面になむ。
 …暮れかかるほどに、皇といふ業いとおもしろく聞こゆるに、心にもあらず、釣殿にさし寄せられておぬ。このしつらひ、いと事なきたる(=簡素な)さまに、なまめかしき(=優美で)、御方々の若き人どもの、我旁らじ、と冬したる装束容貌、花をこきませたる錦に劣らざる見えわたる。

↓
 桃源郷に見立てる
 仙人の住む蓬莱山に見立てる
 簡素さの賛美

倉田実(大妻女子大学)「文学から見た平安時代庭園 —『源氏物語』『胡蝶』巻から—」『平安時代庭園の研究』(奈良文化財研究所、2011.3 奈良文化財研究所学報、第86冊 研究論集17、古代庭園研究)

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

嵯峨野の広沢池のほとりの庵。
 「淋しさに耐えたる人のまたもあれな 庵並べむ冬山里」

引用:『西行物語絵巻 日本絵巻大成26』(中央公論社 1979.5)

西行の嵯峨野の隱者の庵

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

平安文学から読み取る山里の憧れ

- ・山里のイメージ
 人里から離れた、訪ねる人のいない、寂しいが、自然がうつく場所。「寂しさに家出ぬべき山里をよひの月に思ひまね(河花集、296、源道濟)」
- ・開放的な建築の眺望
 眺めの良い山荘を作った。伏見の山荘では紅葉した野山や広々と続く黄金色の稲田が見えた。「野山のけさ色づきたるに、伏見山、田の面につく宇治川の川流、はるばると見渡されたほど、いと艶あるを、若き人々など、身にしむばかり思へ(増鏡、老いのなま)」。宇治川へりの山荘が、鵜飼漁の様子や宇治川を行き交う紫舟や宇治橋が間近に見えた開放的な作りだった(種崎日記の作者が971年に訪れた藤原師氏の家)
- ・仏道修行
 山寺はまるで仙境で、世間の煩わしさを栄華の思いが消え去ってしまう。山寺は執着心や束縛から解放される真の解脱の場所だった。山里は仏道修行の格好の地で、そこで空を覗き、迷いの根元から自由になろうとした。
- ・簡素な美
 山荘が簡素な造りにされたのは、人工的な巧みを尽くした家より自然美に優れた家の方が「あはれ」も興も勝ると見られていたからである。簡素な山荘は豪華豪華な建物に比して頼りなく寂しげであり、そうした姿が山里の寂しさに似ている。
 → 隠遁をどく老荘思想(自然のまま、すなわち無為自然に生ずることをいふ)。竹林の七賢は老荘思想に基づいた談義や行動を表現した。)は作為や技巧を否定するため、山荘も簡素なものとした。
 また、中国の隠遁者たちが素朴で簡素な住宅に住むことで豪華や虚栄を否定した。

34

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

西行の隠遁の庵

引用:『西行物語絵巻 日本絵巻大成26』(中央公論社 1979.5)

松の木=隠遁の象徴

西行、醍醐寺遷座後に、西行は、空法大師のかりの寺、菩提寺にまわった。しばしの暮らしたあつた庵の間に、「草庵の光がある。西行は、「こそ又もあつた庵をどうかたなは、物はひらきならぬふすふん」と語った。隠遁の庵の間に松の樹が建っている。願望らしい行脚院の一画もみえる。

付書院
 → 付書院と隠遁者の密接な関係

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

隠者の庵の流行 (鴨長明『方丈記』鎌倉時代 1212年)

- ・有名冒頭文と豪壮な貴族住宅の批判=住宅論
 「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶたかたは、かつ消えかつ結びて久しとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。
 玉しきの都の中にわれをならべいんかをあらそへる。たかきやいしき人のすみかは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまどかと尋ねれば、昔あり家はまれなり。或はこぞ破れてことしは造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。
- ・ミニマルな住まい
 六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人のひとよの宿をつり、ひこのまゆをいともむかごとし。これを中ごろのすみかになすらふれば、また百分が一にだもおよはず。
 とかいく程に、よはひは年々にかたぶき、すみかはをりをりにせしむ。その家のありさまのつねにも似ず、庭はわづかに方丈、高さは七尺以内なり。所をおもひ定めざるがゆゑに、地をいして造らず。土居をくみ、うちおほひをふきて、つぎめごとにかけがねをかけたり。しん心になはぬことあらば、やすく外へうつさむがためなり。
- ・貧しくても四季を楽しむ心豊かな住まい
 南にかりの日はしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に間伽棚を作り、うちには西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置したてまつりて、蓬日をつけて、屏間のひかりす。…
 春は藤なみを見る、紫雲のごとくして西のかたに匂ふ。
 夏は那谷をきく、かたらふごとに死出の山路をちぎる。
 秋は日ぐらの聲、耳に充てり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。
 冬は雪をあはれむ。つもりきゆるさま、罪障にたどへつし。

35

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

- ・西行の言葉
 「今年こそ心に誓い、せめてこの春のうちに往生を遂げたいもの」
 → 往生の信仰
 → 現世ではミニマルな生活
- 「世を連れて、嵯峨に住みける人の許にまかりて、後の世のこと息らざむべき由申して帰りに、竹の柱をたたりけるを見て、世々経とも竹のはらの一筋に立てたる師は変わらざらん」
 ↓
 竹=隠遁の象徴
 隠遁はつらく、途中であきらめる人が多い
- ・自然賛美
 「花を見し 昔の心 あらためて 吉野の郷に 住まどを思ふ」
 「吉野山 さくらが枝に 雪散りて 花おそげなる 花をたずねむ」(山家集)

引用:『西行物語絵巻 日本絵巻大成26』(中央公論社 1979.5)

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

隠者の庵の実際 (鴨長明『方丈記』鎌倉時代)

世間の喧騒を捨て、貧しくとも、心安らかな悠々適な住まい。
 詩画を楽しむ(文机)、音楽(琵琶)、仏道(法華経)に専念した。

↓
 竹(竹のムズムズしい音さ)の使用
 小さな空間とする(部屋の内部の充実も、周囲の四季の移ろい、鳥のさえずりなどを楽しむ)

引用:『清閑の暮らし 隠者たちとどうなるか』(大岡政明、2013.11)

36

中国	古代…受容	中世	近世	近代
----	-------	----	----	----

引用:『清閑の暮らし 隠者たちとどうなるか』(大岡政明、2013.11)

西行は多くの人に影響を与えた。

隠棲詩人として、在世中から注目され、死後すに、西行物語絵巻が作られる

近世の隠遁者、松尾芭蕉は、西行にあこがれ、西行のようなわびしい旅へ出かけたニ奥の細道

水戸藩の小石川後樂園でも、西行庵が作られる。

大きさは方丈(3×3m)→この大きさが隠遁者の庵の典型的な大きさ



平安時代の世情

度重なる災害による閉塞感

(平安京遷都以来、繰り返す旱魃、地震、洪水、疫病、災厄等の被害に見舞われていました。しかし、上流貴族は儀式と同族間の争いに明け暮れるばかりで、中下級貴族以下の人は閉塞感を深めます。)



山里や隠遁者への憧れ

(仏教的厭世感や無常観や憂き世の意識が人々の間で強くなり、その浄化をしてくれるのが山里だと考えるようになります。貴族は都市の中の庭園や郊外に山里に似せた山荘建築を作る)

平安時代を代表する寝殿造の貴族邸→隠遁者は無常の象徴とする

徒然草第25段

「京極殿(皇孫連の本邸、寝殿造)法成寺(蓮長の私寺)など見るこそ、志留まり、事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の作りみがかせ給ひて、莊園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御後見、世のためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかり懸せ果てんとはおぼしてんや。

大門・金堂など遠くまでありかど、正和のころ、西門は焼けぬ。金堂はその後、倒れ伏したるままにて、とり立つるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、そのかたどて残りたる。

丈六の仏九体、いと尊くでならびおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだ侍るめり。これもまたいつまでかあらん。

かばかりの名残だになき所々は、おのづからあやしき礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに見ざらん世までを思ひ控てんこそ、はかなかるべけれ。

【三河事につけ自分の見ることのない未来のことまで考えて定めておいても、誤にはかないのである。】

(兼好法師『徒然草』現代語訳付き(角川ソフア文庫) p.353 Kindle 版)



浄土宗の教祖の隠遁の家(14世紀)

- ・隠遁者＝竹
- ・付書院二時間ができた隠遁者が存分に文学に励む作業場
- 書院造と隠遁者の密接な関係性

竹杖庵 1351 頃 墨跡繪詞(大正8-9 模写 駒木空知模写)



竹林の七賢

中国の魏の時代に、文学を愛し、酒や囲碁や琴を好み、世を白眼視して竹林の下に集まり、清談を楽しんだ七人の知識人のこと。(阮籍、山濤、向秀、阮咸、嵇康、劉伶、王戎)。政治や社会と、形式に墮した儒教を批判し、偽善的な世間の外に身を置いて、老荘の思想を好んだ

→竹＝文化的、賢い、清貧のイメージ

竹林七賢図景(狩野光信筆室町時代・天文22年(1553))
<https://turkic.ac.jp/herbage/and/50791/>



ところで、竹は近世までには安く使えるものとなっている

竹売りの姿



宿中洛外図上杉本 右せき

○禅僧の隠遁思想

夢窓国師は、鎌倉へのぼる前には、自然の豊かな場所や、風光明媚な土地を選び、一人静かに修行に励む隠遁生活を好んだ。

はからずも国師は、時の政治や権力の争いごとく巻き込まれ後半の人生を明け暮らすことになるが、つねに自然とともにありたいと願ってやまなかった。

→限られた場所で隠遁生活を送れる庭園づくりを行った。



禅の悟りの造形化(永珠寺庭園・室町時代 夢窓疎石作庭) 夢窓疎石も隠遁者だった

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世 近代

東山殿(現慈照寺)は足利義政の理想の隠遁山荘 ≠鴨長明の方丈庵?

東山殿の中の東求堂

隠遁の禅僧「夢窓国師」の墨蹟二幅が阿弥陀三尊像と背中合わせ → 夢窓国師の神格化?

随通者は時間を使って文学に没しむ

囲炉裏 (最低限の火の設備)

四畳半 二隠遁の住まい

隠遁の住まい 二仏間+座敷+囲炉裏の間の三室

仏の空間(阿弥陀三尊像)

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世 近代

二条城の最も奥の部屋 白書院

(將軍の居室。將軍の身の回りの世話を行う小姓や役職者も出入り)

主人の高い教養や安らぎの居室空間を演出

14(白書院) 三の丸 徳川家康 寛永初年

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世 近代

東求堂=隠遁空間の代表ではないか →書院造の成立と隠遁思想との関係

また、文学と仏道は隠遁者とセット。

書院(文学+囲炉裏)

仏(往生の空間)

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世 近代

二条城の最も奥の部屋 白書院

(將軍の居室。將軍の身の回りの世話を行う小姓や役職者も出入り)

主人の高い教養や安らぎの居室空間を演出

禅宗の僧、豊干(ぶかん)と、その弟子寒山・拾得が虎と眠る四睡図(しすいず)を描く

【二条城二の丸御殿種徳堂付アトック】(虎睡堂二条城事務所、2021、初版 2015.3)

部分図

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世 近代

茶道における隠遁思想

・隠遁+仏法+和歌、の三種がセット
p123草庵書院
中世の隠遁者の草庵や連歌師の草庵や貴族の洛中の邸宅の中に設けられた擬似的な山里の草庵が原型。
基本的には、仏間、座敷、いろりの間の三室。
景総庵は山科家の持仏堂で山科家の私事や法談や僧侶との対面の場などにあてられた。
茶室は、隠遁者の三間の縮小であった。
茶室『名室日本の美術22巻 桂離宮(斎藤英俊)小学館1990.12』『草庵と持仏堂』連歌と茶湯-草庵茶室の成立-Jp142

武野紹鷗は、「数寄者といふは、隠遁の心第一に
侘て仏法の意味をも得知り和歌の情を感じべし」(十二か条)といった。
→茶の本意は仏教である

・茶道における隠遁思想
数寄といふは、
「数寄といふは、人の交はりを好まず、身の沈めるをも憂へず、
花の咲き散るをあはれみ、月の出で入りを思ふに付けて、
常に心を澄まして、世の濁りに染まぬをことすれば、
自ら生滅のことも顧みず、名利の余執尽きぬべし。
これ、出離解脱の門出に待るべし」(『染心集』巻六の九)
『茶道要綱』座敷と露地(二)(小学館、1986.7) 日向通「床の間」p154

・ミニマルな理想
侘び茶は「物スクナニ、浄ク、手カクスル」(数寄屋大意)の境地を理想としたので極力補設を省く方向に進んだ。

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世…亭 近代

絵画に見る隠遁思想

書斎図や詩画軸で、亭(東屋)が描かれる。

127「瀟湘草堂」(部分) 画面中央に東屋を描き、その周囲を山木で覆い隠すことによって、風景から離れた理想空間の出現に成功している。瀟湘草堂は、(唐) 劉長卿の詩に由来し、瀟湘草堂の詩に由来する。この詩は、劉長卿が長安に在った時に書いたとされる。瀟湘草堂は、劉長卿の詩に由来し、瀟湘草堂の詩に由来する。この詩は、劉長卿が長安に在った時に書いたとされる。瀟湘草堂は、劉長卿の詩に由来し、瀟湘草堂の詩に由来する。この詩は、劉長卿が長安に在った時に書いたとされる。

引用：『人間の美術』ハヤシと由美子 (2004.2) 雑誌や図録における隠遁

中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世 近代

二条城二の丸御殿における、隠遁

1 遠侍 (お侍が二の丸)

2 大広間 (各地の大名が將軍と対面する)

3 黒書院 (將軍が近い人をおけ入れ)

4 白書院 (將軍のみのリラックススペース)

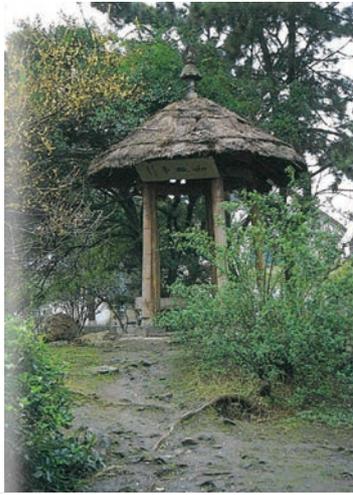
中国 古代…受容 中世…禅僧の隠遁 近世…亭 近代

韓国の亭

庭園内の休憩施設。
絵画の中の亭と同様

掛造の亭

中国の亭（ティン）
庭園内の休憩施設。



如教亭 嵐山寺の資料室亭。この一帯が宋代の遺構。私邸の虎園（しんえん）の中の南宋時代の建物。邸の庭園。

縮景園
船のような四阿 悠々亭(ゆうゆうてい)



では、日本の亭は？
縮景園(広島)の浅野家の大名庭園
眺望の四阿 超然亭(ちょうぜんてい)

中国	古代…受容	中世…禅僧の隠遁	近世…亭	近代
----	-------	----------	------	----

亭の隠遁思想
『縮景園記』(1713、堀正修(浅野家の権官)著、5代藩主浅野吉長の命を以て著された)

傾斜にはこんもり繁った松の木、長い竹が植えられ、
…澄んだ大空に高樓が浮ばたち、かるやかな舟が下の池に浮かび、超然として神仙の思がある。
…明るい軒や窓から涼しい風を引き入れ、書を読み絵画を覧、香を焚き茶をすすり、
杯をのみかしたり詩文を詠じたり、
…堂に入ると先の殿の清らかな宴会の様子を思い出し、
その高樓にのぼれば、先の殿の自然のまままで人為を用いないことの爽しさを思い、(→老荘思想)
…茅葺、山から刈り出したままの垂木、竹の門、柴の戸、(→隠遁者の樹木)
すべて事は簡単で易しいものから成っており、(→ミニマリズム)
まさに上古純素の遺風があって、他の大名のような豊かで奢り高ぶった風習はここでは全く見られない。
これも既に俊約の手本を示したといえるのではなからうか。
…鑑んで考えてみるのに、わが殿は孝行を尊び、俊約をおねと、公をあつてとされている。
(→隠遁思想が俊約と結び付けられるのは、江戸時代の特徴)



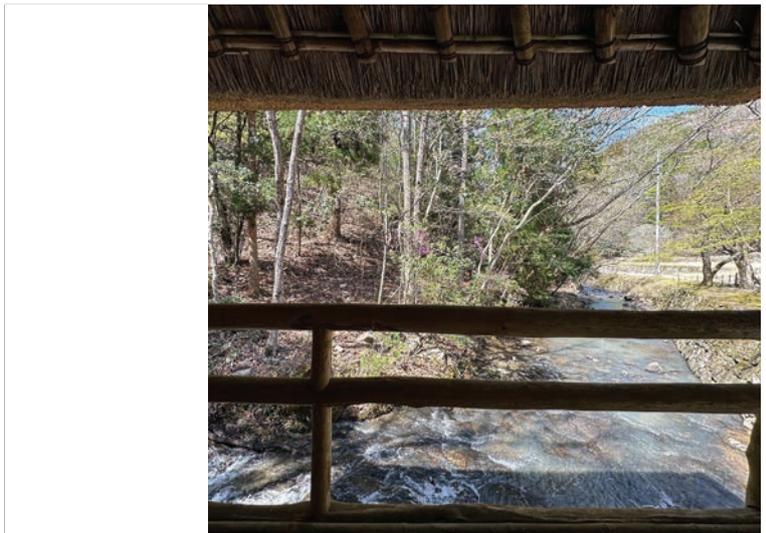
縮景園
眺望の四阿 超然亭(ちょうぜんてい)

中国	古代…受容	中世…禅僧の隠遁	近世…亭	近代
----	-------	----------	------	----

閑谷学校
「山水清閑、宜しく讀書講学すべき地」(池田光政、1670年に創設)
閑谷学校のはずれにある黄蘗亭(1813年)
全国から閑谷学校を目ざして訪れる文人墨客をもてなす施設。



縮景園
雨傘のような四阿 看花欄(かんがど)



黄葉亭の隠遁思想

頼山陽が、黄葉亭で遊んで「黄葉亭記」を書いた。現代語訳は以下

「学舎の東二つの谷川の合流するところ、
樹が最も老い、石が最も秀いで美しいので、
ふりかえて見てこの様を楽しみ、そこでカを併せて一軒の亭を置いて遊び休む処とした。
…黄葉と名づけたのは亭が秋の終りに竣工し、且つ黄葉の歌を引用したからである。
…古人は一言っている、五色は人の目をめくらにしてしまう。
故に人造の錦繡に目くらまされて自然の華とか葉の真に美しくよるこぼれならぬことを知らないのである。
…私は恐れる其の心と目のつけ所が、
紫の印綬を帯びて出世して高官となる高貴な身分となる事ばかりを考えている事から離れなければ、
木の葉が黄葉する自然の美しさ等わからない。
…私が父を郷里(広島)に訪れる時、閑谷に立寄って烈公がのこされた構造物を仰ぎ見、
退いて諸生と亭に上って、
再び天地自然の造ったものと人間の造ったものとの区分を論ずることが近いうちにあると思う。
此の記は前以って情景を書いた絵姿ともなるであろう。」

竹の神格化

智仁親王が、和歌に
「竹に囲まれた住居」
「松風入夜琴」を詠む。
↓
竹や松に対するあこがれがあった。



總垣

現形を復元し、西の2つ割りの長い竹を等間隔で敷き並べ、竹と竹の間には細い懸竹を横に打ち込んでいく。

桂離宮の亭 賞花亭

畔の上にある、春の茶屋
小高いところにあるので、ここから周囲の
花をめでた
大胆な大きな窓があるのはそのためだろう。



白楽天桂離宮では、白楽天『白氏文集』を順守して中にて、
「池西琴亭」 → 西に松琴亭をつくる
「作西平橋、開環池路」 → 池の中に小島を築り、平橋、反橋などを掛け、池をめぐる道を付けた。
「作中高橋、通三島径」 → 中国の伝説の神仙の住む三つの島(蓬莱・エイ州・方丈)を表現



賞花亭

「亭上、四面の山を見る。天下の絶景なり」
(桂山荘の様子が『鹿苑自註』(相国寺普光院主の日記)に記される)



「下桂瓜島のかろ(軽)き茶や」

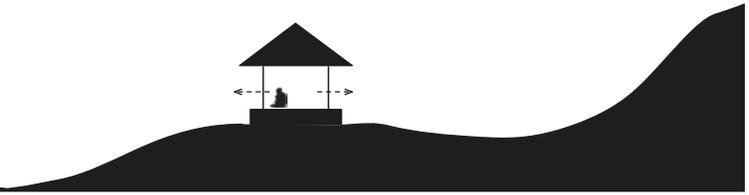
親王は公家など客を桂離宮に招くこともあり、その招待状に上記の文言がある。「かろ(軽)き」はもちろん謙遜の意を込めた言い回しであるが、川原の瓜島に隣り合う建物は実際にもそれほど格式ばらない造作ではあったのだろう。

↓では何を愉しんだか

「庭には山が築かれ、池が掘られ、池に舟があり、橋や亭があり、亭の上から望む四方の山は天下の絶景であった」(1615年に桂離宮を訪れた相国寺の長老)『名宝日本の美術 22 巻 桂離宮』

↓つまり、

周囲の美しい庭園を愉しむために建物はあえて簡素に軽快に作った
建築自体でなく、建築の中において見える外の風景が重要だった



持仏堂(園林堂)

重厚な仏堂。隠遁の空間では、仏堂に励むことも重要な要素だった。



近代以降の隠遁思想の衰退

○明治以降の数寄屋に建築家がほとんど登場しない
「専門の棟梁と言えども、地主の一步後ろを歩みながら数寄屋を実現するものであってみれば、そこに建築家が介在する余地は本来あり得なかった
…中央や地方の官僚組織では、地主の好みに合わせて作っていく数寄屋建築に馴染まなかった。構成の規則があつていないようなものである」
鈴木博之『近代建築と数寄屋空間』『茶道要録6 近代の茶の湯』(小笠原, 1985.32)

○建築家が数寄屋建築に参入するも、
武田五一→茶室研究はするが、積極的に茶室を作らない
朝沼邦夫『武田五一「茶室建築」の心づて 其の意匠と作風への影響』『日本建築学会年報』(2000年 45巻 537号 p.257-263)
(「建築家は茶室をつくるべきではない」と武田五一がいわれたと坂井がどこかで読んだが、思い出せず。)

藤井厚二 → 隠遁思想を踏まえた文章が少しある。

吉田五十八 → 隠遁の意識での自作の説明は見つからず。

○隠遁思想は、近代数寄者(益田孝、高橋義雄、山縣有朋)や職人(御木魯堂)に受け継がれた

無鄰菴(明治29)
山縣有朋



無鄰菴(明治29)の隠遁意識
山縣有朋著「御賜椎松乃記」

「人に遇て問うを休めよ南禅寺、一帯の青松路迷はず」と
頼山陽が歌った松並木(→隠遁者のイメージ)の付近に手のひらほどの土地(→ミニマリズム)がある。
…松陰と流れとを友人として老後を過ごせればと、ここ数年で草庵を結び、無鄰菴と名づけた。
…琵琶湖疏水を松や杉の深いあたりで引き入れたところ、落ちる滝の音がはげしく、奥深い山の奥もこう
だらう(→山里の憧れ)と思うほどである。
…春は夜がすっかり明けた山の端の景色は言うまでもない。
夏は川と野に曇りなく澄む月のすがすがしごとよ。
秋は夕日が華やかに射して紅葉が美しくなる。
冬は雪を被った比叡山の山頂が落ちてくるような感じがし、それぞれの季節の眺めは言葉で表現する方
法がない。
(→四季を楽しむ)

…早朝には文を読み、夕暮れには歌を詠じ、あるいは茶を批評したり囲碁を打ったり、
または酒を酌み交わし、時には古今を談論するなどして、
世俗の塵を洗い流す

…「みめぐみのふかきみどりの松がけに老いもわすれて千代やへなまし
(天皇からの恩恵の深い緑の松影に、老いも忘れて長い年月を経てしまったのだろ)」

近代における隠遁や神仙の思想

煎茶席に文人好み(隠遁思想含む)が反映されると指摘される。

吉田茂郎に七賢堂がある。池は蓬萊山を表し、隠遁思想がある

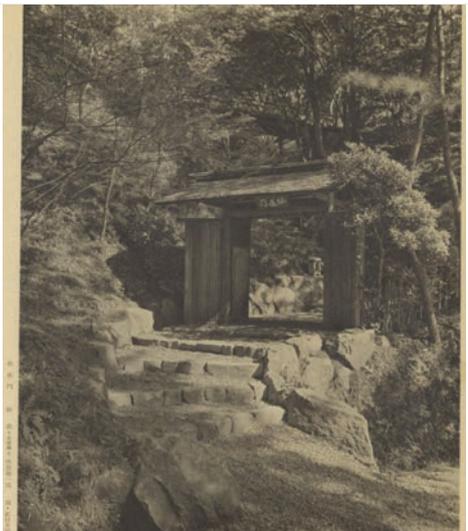
岩崎家大磯別邸の最も高いところに孤亭があって、野の緑をみわたせた。虚心庵、
は多く竹材を使って作る。これらを別業の十七勝とした。

近代でも、益田など、隠遁者の仙人の生活を理想とした。

豊平館にも「蓬萊の間」が存在



神奈川の大磯の別荘地にある、
三井家の別荘、城山荘に、
仙遊門があった。



聴竹居(1928年、藤井厚二設計)

「生活改善住宅」と説明される。しかし、隠遁思想があるのでは？

住宅に於て能ふ限り刺戟の少ない閑雅なることを欲する場合には、日本趣味を選ぶのが最も適当…
今か今と日本の住宅にて洋風趣味を好んでも、之が其の環境に合致し極めて氣持よき場合は稀にして、
洋風住宅は形に於ても色彩に於ても我國の庭園にて賞せらる、赤松楓其の他に對して巧みに調和せしむるこ
とは甚だ困難です。

住先は自然に同化して之に包容され、周囲に反抗せざるものでなければなりません。
従つて、屋根は空に聳えずして勾配を緩かに、
二階建の場合に於ても一階を大に二階を小にし極めて安定せる形を持つるものを可とします。

茶室建築の面白味は窓にある…窓枠は同一材料のみにならず、
竹或は細い丸太を利用すること自由自在にして、
西洋住宅に於て見るを得ざる驚嘆すべき意匠を示します。

『日本の住宅』(藤井厚二、岩波書店、1928、p139)

→近世までの隠遁的記述と異なり、
西洋と日本の比較の中で、
「閑雅」、「周囲に反抗せざる」などが述べられる。



聴竹居(1928年、藤井厚二設計)



聴竹居(1928年、藤井厚二設計)



聴竹居(1928年、藤井厚二設計)



隠遁の否定

(待庵を取り上げて、)

利休はこうした消極的な「侘び」ではなく、

「一字の草庵、二畳敷」のうちに新しい美を発見したのであった。

…世捨人の、隠者の世から離れた消極的な生活ではなく、

豪華な書院造に劣らぬ、新しい美を創造する、積極的な生活であった。

『日本住宅史の研究』太田博太郎、p.209

↓

隠遁や侘びはネガティブにとらえる

近代では、隠遁者の言葉がなくなり、「わび」という言葉が使われだす

日本の現代建築家の隠遁者の言葉との類似性

row houseという住宅。敷地は小さな長屋が密集する東京の下町。

そこにとっても小さくて快適な環境をつくる。…

row houseの植栽計画と家具の配置計画である。

春には花が咲き、

夏には若葉を芽吹かせ、日陰をつくり、

秋には色づく木や草花などの植物を生活の中心となる庭

にどのように配置するかを検討する。

Junya Ishigami : small images 石上純也著 (現代建築家コンセプト・シリーズ、2) INAX出版、2008.9、p53



隈 研吾『小さな建築』(岩波新書)

自然は建築を小さく、人間の知能は建築を大きくしようとする。

…

○3・11と小さな建築

津波に続いた原子力の事故は、さらに、

『強く合理的で大きな建築の無力さをわれわれにつきつけた。

…身近な材料を使って、自分の手で組み立てられるような、

『小さな建築』が面白いと思った。



トピックス

0 中国…隠遁思想の始まり

1 古代…隠遁思想の受容

2 中世…禅僧の隠遁思想

3 近世…庭園や亭における隠遁思想

4 近代…隠遁思想の衰退

絵画から読み解く住まいの思想と美意識

京都大学大学院文学研究科
筒井忠仁

1

内容

はじめに

- 1 山水画と「隠逸」思想
- 2 詩画軸における「隠逸」
- 3 障壁画と「隠逸」

おわりに

2

1 山水画と「隠逸」・「ミニマリズム」

絵画におけるミニマル

20世紀 → 抽象表現主義 フランク・ステラ

古美術 → 明確な定義はない

- ・色数が少ない
- ・モチーフが少ない
- ・筆触が最小限

3

1 山水画と「隠逸」

「隠逸」

思想の萌芽は『詩経』の時代にはすでに存在。中国南北朝期に明確化し、唐の時代に流行。

山水画

背景描写として発展。中国南北朝期には独立した画題となる。唐の時代に流行。「隠逸」思想と結びつく。

4



中国 陕西省 富平県 乾陵陪葬墓

5



中国 陕西省 富平県 李通堅墓 738年

6



7



8



9



10

2 詩画軸と「隠逸」

「水墨画」

唐の時代に発達。山水画と結びつく。

色数・手間・筆数などの点でミニマリズム的表現技法。

日本には平安時代末までには流入。近代における洋画のような存在。

室町時代に詩画軸として流行

11

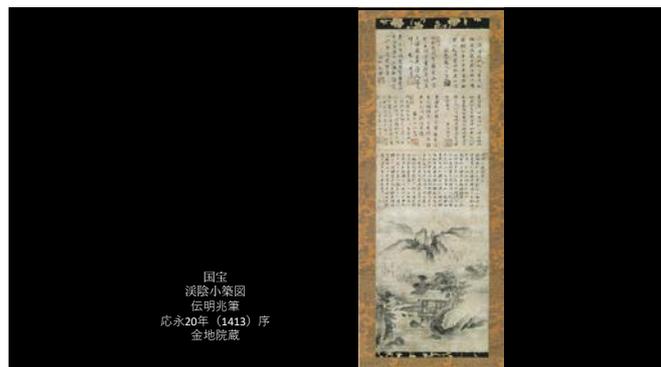
「詩画軸」

下方に絵を描き、上方にその絵の内容にあった漢詩を書き表すもの。
詩の面白さ、書的美しさ、画の趣きが一体となる詩書画一致の境地を目指す。

5つの題材

書齋図、送別図、詩意図、実景図、禅機図。

12



国宝
溪陰小築園
伝明兆筆
応永20年(1413)序
金地院蔵

13



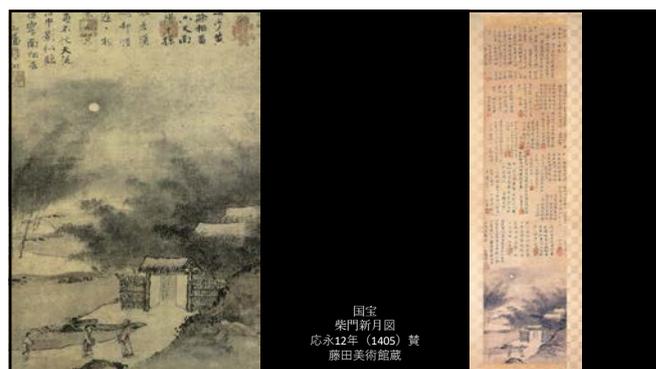
国宝
溪陰小築園
伝明兆筆
応永20年(1413)序
金地院八窓席床の間にて

14



重要文化財
舟行送別園
伝周文筆
京都国立博物館蔵

15



国宝
柴門新月園
応永12年(1405)賛
藤田美術館蔵

16



重要文化財
芭蕉夜雨園
応永17年(1410)賛

17



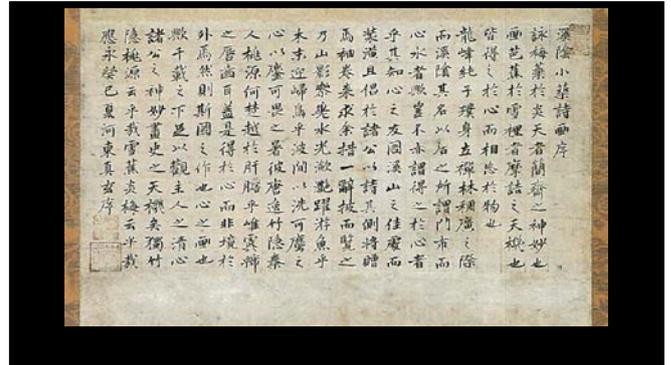
国宝
瓢箪園
如拙筆
応永22年(1415)以前
退蔵院蔵

18



国宝
淡陰小築園
王孟頫筆
応永20年（1413）序
金地院蔵

19



20

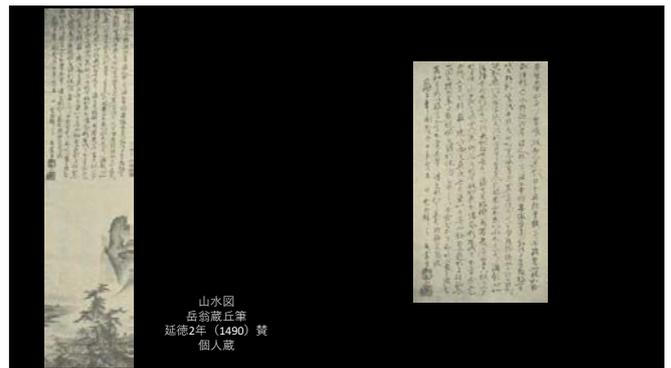
絵画の向こうに憧れの地・中国を見る。

隠逸先は理想の中国 桃源郷、徂徠山・・・
 隠者のモデルも中国の文人 白楽天、李白・・・
 （隠逸の型 四愛、西湖、瀟湘八景、太公望、李白觀瀑・・・）

憧れの二重のベクトル → 隠逸 → 中国

現実と絵画は主体と客体の関係

21



山水園
岳翁黃公望
延徳2年（1490）賛
個人蔵

22

「可坐而収蓄者、蓋画使然也。」
 「若勞渡涉倦、登臨可能哉。」
 「混真仮於胸中」
 「満願回仏、・・・豈真仮可二乎。」
 「由仮以入真、則禪寂之境、吟嘯之興、決無它差」
 「以為画則不可參於心。究于源・・・」

23

真と仮の二重性
 絵の中の理想郷と現実世界
 目的としての真理の世界と媒介としての絵画（山水画）

これらの区別を取り払う
 現実と絵画世界が融合

24

3 障壁画と「隠逸」

鎌倉末までには水墨山水障壁画が登場。

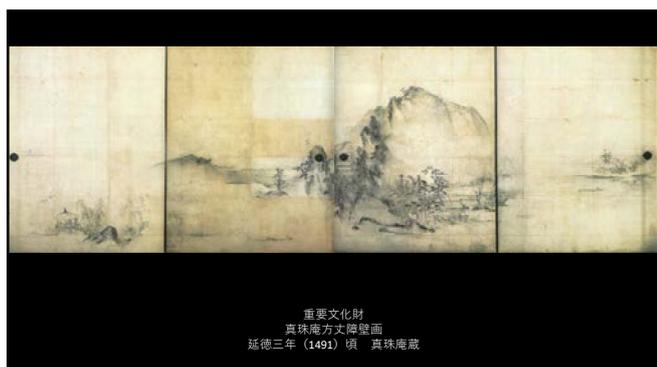
現存遺品は15世紀末以降。

25



国宝
法然上人絵伝 巻4 部分
14世紀
知恩院蔵

26



重要文化財
真珠庵方丈障壁画
延徳三年（1491）頃 真珠庵蔵

27

3 障壁画と「隠逸」

現実のイリュージョン 没入感を誘発
現実と絵画が一体化

28

希世靈彦「題画錦雞」『村庵藁』

而吾大人相君、賜之典厩公、公之心愛焉而不置、俾丹青貌其状、而張之所居小閣之壁……余因竊見其塔前、則有馴蓄者、見其壁上、則有写生者、于壁于塔、兩禽相向、是一隻而成一双

29

「臥遊」

宗炳『画山水序』

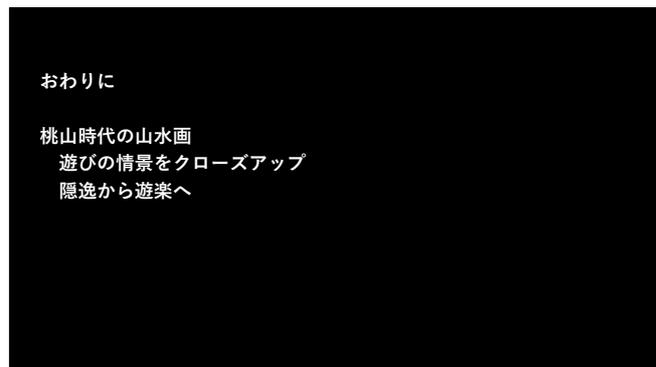
「臥以遊之」

30

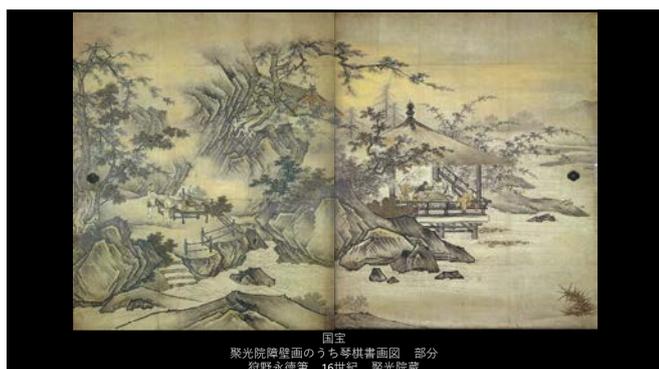


重要文化財
真珠庵方丈障壁画
延徳三年(1491)頃 真珠庵蔵

31



32



国宝
聚光院障壁面のうち琴棋書画図 部分
狩野永徳筆 16世紀 聚光院蔵

33

市中の山居

一佗数寄の茶室の発生一

20241019 桐浴邦夫 KIRISAKO Kunio

『日葡辞書』（1603）にみる「市中の山居」と「山居」と「閑居」

■ 「市中Xichū」の項目の「市中の山居Xichūno sāqio」

広場や市場の中に居て、隠者であること。すなわち、人中にまじっていないながら僧侶や隠遁者であることをやめないこと。

⇒ 「市中の山居」には、人中に交じって僧侶や隠遁者であることをやめないこと

・・・ここでは建築のことではなく、僧侶あるいは隠者という人のこと

⇒ 「市中隠」のことではないか・・・（後述）

■ 「山居 Sangio」の項目

Yamani iru. (山に居る) 人気のない所とか山の中とかに住むこと。

⇒ 山の中に住むこと・・・山での生活（衣食住）およびその心の状態

・・・隠遁・隠棲生活（衣食住、心の状態）を示す。僧侶・隠者という意味は直接はない（広義としてはある）

⇒ 『日葡辞書』の中に混乱が見られる

⇒ この時期にこの言葉の意味が大きく変化してきたのではないかと考えられる

市中の山居（本数寄から佗数寄）

ジョアン・ロドリゲス (João Rodrigues Tçuzu) : 1559-1629

ポルトガル人のイエズス会士でカトリック教会司祭

天正5(1577)年 来日

慶長15(1610)年 徳川家康の命により追放

『日本教会史』 岩波書店 大航海時代叢書 第9（1967）、第10（1970）

この都市にあるこれらの狭い小家では、たがいに茶に招待し合い、そうすることによって、この都市がその周辺に欠いていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では、彼らにはこの様式が純粹な隠退よりもまさると考えていた。というのは、**都市そのものの中に隠退所を見出して、楽しんでいた**からであって、そのことを彼らの言葉で、**市中の山居 xichū no sankio** といった。それは**街辻（プラッサ）の中に見出された隠退の閑居**という意味である。この流儀は大いに取り入れられていったので、茶の湯chanoyuを嗜んでいたすべての人をいっそう満足させるに至り、その茶の湯chanoyuは、堺の中ばかりではなく、他の地方でも、東山の古い流儀を捨てて、すべての人がそれに追従した。

「市中隠」

■ 「市中の山居」という言葉は、『日本教会史』、『日葡辞書』に掲載
それ以前には見られない（管見）、近いとみられる言葉で「市中隠」がある

■ 『二水記』（鷺尾隆康） 天文元年（1532）9月6日

御掃路之次宗殊茶屋御見物、山居之躰尤有感、誠可謂市中隠、當時數奇之張本也

⇒後述

■ 『一休和尚年譜』 宝徳元年（1449）

師五十六歳、一日、街頭逢僧、問師曰、市中何有、僧曰、如何是市中隠、師曰、何似生、僧無

語、師打偈曰、龍頭蛇尾漢、

⇒ **市中に隠者が居るか居ないかの問答⇒「市中隠」は隠者のこと、町の中にいる隠者**

■ 『経国集』（平安時代）

帰休独臥寄高雄山寺空海上人（小野岑守）の言葉として「寄言隠藪客、大隠隱朝市」

⇒ 「大隠」とは朝市すなわち市中にいる隠者

⇒ つまり悟りを得た人は、その住みかは、山中でも、町中でも関係ない

⇒ これは「市中隠」と同じ意味

「市中隠」

■『二水記』（鶴尾隆康）天文元年（1532）9月6日
御掃蹄路之次宗殊茶屋御見物、山居之鉢尤有感、誠可謂市中隠、當時數奇之張本也

⇒宗殊の茶屋を見物した。その「山の中のような鄙びた住まい方」には感（深く心に感じるもの）がある。
いわば「市中に住む隠遁者」のようだ。

⇒「山居」には、「山の中に住むこと」（日葡辞書）との意味があり、
「山居の鉢」の言葉には、生活スタイルとしての衣食住が含まれる、つまり住空間のことを含む住まい方のことを示すと考えられる

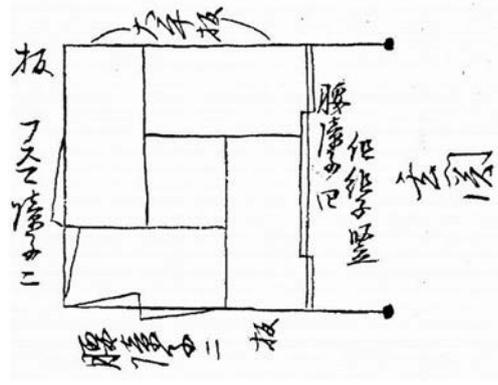
（加藤繁生：「市中隠」および「山居」の語義について（史迹と美術201708）において、「山居」の語について住居の意を否定する。しかし暮らしぶりと考えるならば住居の意は含まれる）

（参考）

■『蔭涼軒日録』延徳2年（1490）12月1日の条
往慈泉著布衣团炉茶話及深更

⇒慈泉庵を訪れて、布衣（ふい）を着て炉を囲み、茶を飲みながら話をしているうちに深夜になった。
⇒この空間は团炉葦があり、「布衣」すなわち庶民の服を着て、炉を囲んで、茶を飲んだ
⇒將軍にも近い蔭涼軒主（龜泉集証）が、庶民のくらしに身をやつし茶を飲む（つまり隠棲につながる）

和泉草 紹鷗の床ナシ四畳半



日葡辞書〔1603～04〕

「Guenquan（ゲンクワン）〈訳〉そこを
通って、チャノユに行く、戸口、
門。同語。内側の門で、そこを
通って人の家に入っていく」

あらためて「市中の山居」

「隠」・・・隠者のこと、通常は山中などに住む。この言葉に直接的な建築としての意味はない
「市中隠」・・・市中に住む隠者。「大隠」とも。悟りきった隠者は、その居所にこだわりはない
「山居之鉢」・・・山の中のくらしの形態（衣食住を含む、隠者の住み方も含む）

やがて「市中の山居」の言葉が出現
「市中隠」と言葉の意味が交錯
『日葡辞書』・・・隠者の意、また一方で「山居」についてはその生活を意味する・・・矛盾

『日本教会史』
・・・というのは、都市そのものの中に隠退所を見出して、楽しんでいたからであって、そのことを彼らの言葉で、市中の山居xichú no sankio といった。それは街辻（ブラスサ）の中に見出された隠退の間居という意味である。

⇒「隠退所」という場所、そこで楽しむという生活
⇒「隠退の間居」という隠者の静かな生活

⇒「市中の山居」は、市中における隠者の静かな生活、およびその心の状態、それは衣食住を含むもの

玄関（『国史大辞典』）：
玄妙に入るの門、幽玄の道の入口の意であって、本来禅門に入ることを意味したが、建築に転じて、方丈の隅から南に突出する入口の部分を指している。元弘元年（一三三一）に作製された「建長寺伽藍指図」に、方丈の入口を「玄関」と記しているのが記録としては最も古い。方丈の玄関は土間の廊で、南端あるいは側面の端に扉を設けて入口とし、内側を吹放しとする。室町時代さらに転じて、方丈のみならず武家の邸宅の中門・車寄を指して用いた例もあるが、この語が広く普及したのは江戸時代であって、武家・町人の住居に造られた正面の入口を指しているようになった。

（稲垣 栄三）

玄関の語源（『日本国語大辞典』）：
「老子」の「玄之又玄、衆妙之門」、つまり玄妙に入るの門の意から「嬉遊笑覧・三省録・大言海」。玄々の関門の義から（類聚名物考・它山石）。

『壺中爐談』（立花実山）

・・・世間の塵垢染を離れ一心清浄の無一物底を強いて名付けて白露地といふ。其の心地の外相は樹石天然の一庭なり。されば市中宅辺に自然の地形勝概まれなる故に木を植え竹を群し朝夕の露を愛で、月雪にし深からぬ庭のうちもおのづから芳野葛城の興趣をおもひ・・・

『洛中洛外図』 歴博甲本



図A 左隻第二扇



図B 左隻第四扇

『宗長手記』大永6年(1526)8月15日

下京茶湯とて、此比数寄などいひひて、四畳半敷・六畳敷をのの興行。宗珠さし入、門に大なる松有、杉あり。垣のうち清く、蔦落葉五葉六葉いろこきを見て

⇒下京であるから、大きな邸宅ではなく、小さな庭を備えた町家と考えられる

⇒町家の裏庭に「垣」で囲った庭があった

※『山上宗二記』に記された、珠光の茶室の「坪ノ内二大ナル柳一本在」の意味が理解される。つまりここで「坪ノ内」といっているのは、山上宗二が天正時代(16世紀後半)に使った言葉
15世紀末から16世紀初頭にかけては、使われていなかった
その当時は、「垣」と呼ぶのが一般的

町家の裏庭を囲った「垣」は茶の湯のために、都市の雑踏と区切りをつけるため、必要な装置であった。そういうものが珠光の茶室に備わっていた

「坪ノ内」および「垣」について

坪ノ内・・・一坪(約3.3㎡)あるいは一坪半程度の小さな庭

『山上宗二記』(天正14(1586)、天正16(1588))

昔モ珠光ハ北向・右勝手、坪ノ内二大ナル柳一本在

⇒珠光・・・1423~1502、茶道の祖

⇒柳が一坪程度の坪ノ内にはおさまらない

『紹鷗遺文』「池永宗作への書」(16世紀半ば)

庭ノ垣ハ色々ニスルト云トモ土カベ尤モヨシヨイコロノ小石ヲソエテスルナリ水を打テハ幽ニ石アラワレテコヒル也

⇒庭の垣は土塀が良い(現代の一般の垣のイメージは植物ここでは土塀が良い)

⇒小石が敷いてあるだけの何もない空間(植物を植えた形跡はこの文にない)

⇒小石に水を打つことによって、「コヒル」すなわち、古びて趣あるようになる

⇒特に「坪ノ内」の言葉を使用していない、しかし、まさに「坪ノ内」のことを記している・・・すなわち「垣」は「坪ノ内」を示している

具体的に「市中の山居」とは

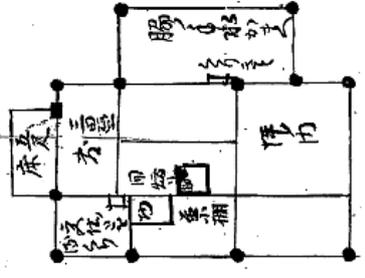
町に住む人々の住居「町家」の裏庭に「垣」(図A)をめぐらせて、その中に樹木を植え、小さな家を建て(あるいは元からあった小さな家を利用して) 茶の湯などを行っていた

やがてその庭も、なにもない、より小さな庭を造るようになっておそらく「市中隠」の考え方が影響し、具体的な山中に似せる必要が無くなった

ただし町家の裏庭は市民の日常生活空間の一部
よって、**最低限の囲いを造った・・・これが「坪ノ内」(図B)**

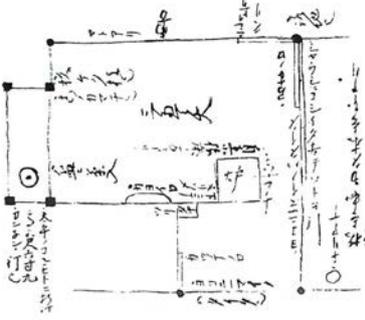
「坪ノ内」から「土間庇」

千利休、大坂屋敷三畳大目

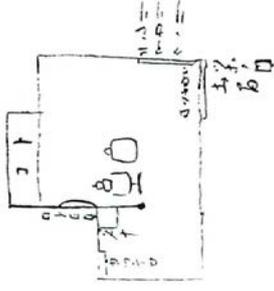


『山上宗二記』

千少庵による利休三畳大目の復元（京都屋敷）



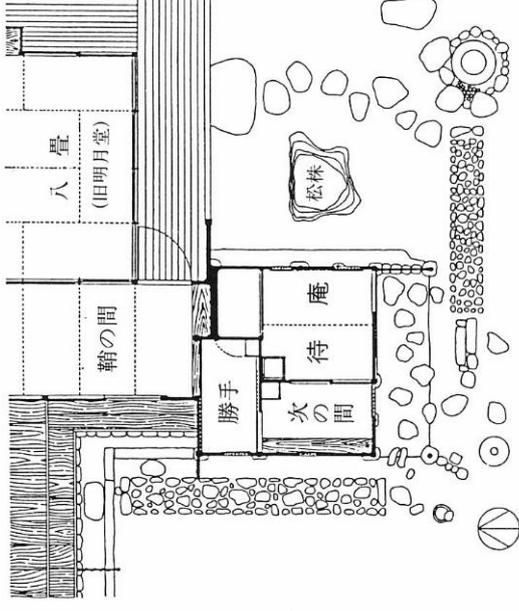
『松屋会記』慶長13年2月25日



『松屋会記』慶長14年5月13日

『山上宗二記』

妙喜庵待庵平面図



「坪ノ内」から「土間庇」の変化

躰口の発生 「ひらかたの舟付にくぐりにて出るを侘びて面白し」
(「利休居士伝書」)

「躰口」最古の遺構、待庵（天正10年、1582）頃・・・「土間庇」を備える

『山上宗二記』の利休大坂屋敷、待庵の2～3年後

・・・「坪ノ内」と「土間庇」を備える

1580年代が、「坪ノ内」から「土間庇」への過渡期か（仮説）

「市中隠」の考え方から、「坪ノ内」すら省略

自然とともに暮らす庶民住宅の「見立て」

⇒ のちに言う「侘数寄の茶室」の成立